

新刊紹介

岡村正人博士著

「株式會社金融の研究」

中島哲人

既に多数の好著を公にせられた岡村教授は今度又その集大成として「株式會社金融の研究」なる著作を発表せられた。教授は元來筆者とはその専攻の領域を異にする關係上、適當なる紹介者ではありえないが、同著が經營經濟學の専攻者のみならずいやしくも經濟學を學ぶ者乃至實際の企業經營にたづさはる一般の讀者にも極めて有益なることを知る以上、いさゝか紹介の勞をとり度いと思ふ。

近世技術の革新發達、固定設備の増大により、企業が大規模經營を必要とするにつれて、これは諸個人の資本を集中結合して、これを一個の企業資本として機能せしめる集合企業を生み、特に典型的支配的企業形態として株式會社を生ぜしむるに至つたのである。これは一つに産業の發達につれて、大規模の機械が愈々重きを占め、労働はそれによつて省かれる。いはば資本の有機的構成が愈々高級化する過程に外ならない。かかる傾向の支配する事態にあつては、企業が個人企業から集合企業の段階に進むのみならず、集合企業の代表的形態として株式會

(八四)

八四

社企業が愈々重きを加ふに至るのは當然である。ところで教授の研究にあつては、かゝる株式會社企業が何故に近代の支配的な代表的企業形態となるに至つたか、これを貨幣的乃至金融的側面から解明しようとするものである。従つて單なる株式會社の法的性格の研究ではない。其の根本的見方はあくまでも經濟學的であり、歴史的發展的である。企業が何故に個人企業の當初の段階から集合企業へと發達し、後者にあつても、企業主體間の結合が人的なる集合企業の段階から更に主體が資本的に結合する集合企業の段階即ち株式會社へと進展するかを金融的側面から詳細に考察しているのである。即ち生産組織に於ける手工業から工場制度への發達に照應して企業組織においても個人企業から株式會社への發達が見られるのであるが、かゝる資本主義經濟の發展段階に照應する企業的發展を金融的側面から考察しようとするのが教授の本研究における根本的立場に外ならない。教授の次の言葉は最も良くこれを説明するものである。即ち「株式會社は資本主義的生産の進行と共に證券金融を益々顯著に展開して行くことにより、高度の資本集中の企業形態となる。」と。かくて教授にあつては株式會社金融の特色として資本の證券化をあげ、企業資本の高度集中の實現こそ、かゝる證券金融に外ならずとなし、證券金融の分析に重點がおかれることとなる。かくて株式會社における資本の證券化・證券金融といふ資本調達の特異性優越性を今日の大規模生産乃至大規模經營の爲の資本を賄ふことを可能ならしめるものであるとい

ふ。即ち教授にあつては、證券金融の兩翼として株式金融と社債金融をあげ、これこそ株式會社をして最高度の資本集中形態たらしめるものであるとなしてゐるのである。更に群小異質投資層に對する株式乃至社債の適應する爲の種別化も實は企業資本の増強化要請を十全に充足しようとする金融的考慮の具體的表現であるといふ。従つて此の意味に於て、教授にあつては、特に近代の製造工業が消費市場の急速な擴大に伴つて益々大規模の生産の方向に進み一方に生産單位の擴大・他方に之に伴ふ大資本經營の勃興を招來しつゝある資本主義經濟の現段階にあつて、株式會社こそ最も良くかゝる金融的要請に適應しうるものであるといふことになるのである。

けれども教授にあつては、證券金融を單なる企業金融と看る一般の立場とは異り、證券金融の下、資本集中が如何に高度に進行しようとも資本による經營支配は少しも後退することなく、却つて企業經營に對する資本支配は一層強化せられると看る。即ち企業結合ことに持株會社方式による企業結合の發展はかゝる傾向を更に強化するものであるといふ。従つてミーソズ等の見解とは對蹠的であることは云ふ迄もない。この意味に於て教授にあつては證券金融を企業支配との關聯に於て捉へるものであるといふ事が出來よう。従つて企業支配者による證券金融的操作の問題については詳細に互る吟味がなされてゐるのである。このやうな意味に於て本研究は此點においては從來の研究に一步をおしすゝめたものであると云ふ事が出來よう。従つ

て本書の學界への貢獻は極めて大なるものがあらう。本書紹介の理由も亦此處にある。(有斐閣・定價三百五拾圓)